

ドライデンのホラーティウス翻訳

—— Epode II の場合 ——

高 谷 修

はじめに

出版者のジェイコブ・トンソン (Jacob Tonson, c.1656-1736) がジョン・ドライデン (John Dryden, 1631-1700) の助力を得て、彼らにとっては共同出版の第二集となる『杜』*Sylvae* を出版したのは 1685 年の初頭であった。この詩集は、その前年に出版された『雑詠集』(Miscellany Poems) に続くもので、題名 (*Sylvae, or the Second Part of Poetical Miscellanies*) から察せられるように、前作と同様の性格を有する、雑多な作品を収めた作品集であった。タイトルページには、題名の下にウェルギリウスの『アエネーイス』から 'Non deficit alter/ aureus; et simili frondescit virga metallo'¹ という 2 行¹ が印刷されていたが、これによっても、前作と同様の成功を期待していたことは明らかである

1 Earl Miner and Vinton A. Dearing, ed., *The Works of John Dryden* (University of California Press, 1969), vol. 3, p. 2. なおこの 2 行は『アエネーイス』第 6 巻の 143-44 行で、主人公アエネーアースが地獄に下るために金枝をお守りとして折り取る場面から取られている。その意味は、「(たとえ金枝を折り取っても) 第 2 の (枝) も黄金で、欠けたままではない。そして同じ金属によって若枝は枝をつけるから」というものである。

う。名前はローマの詩人スタティウス (Statius, 40-96 AD) の *Sylvae* に由来することは、同じくエリザベス朝の詩人・劇作家のベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) に *The Forest* という題名の詩集があることを考えれば、容易に想像できるであろう。

さて、ドライデン・トンソンの *Sylvae* の大部分はドライデンによる古典作家の翻訳によって占められている。William Bowles に拠るカトゥッルス (Catullus, 84?-54? BC) やテオクリトス (Theocritus, fl.c.270 BC) の翻訳があり、また匿名氏に拠るホラーティウス (Horatius, 65-8 BC) のオードの翻訳があるとはいえ、詩集の中核をなすものはドライデンの翻訳であった。そのため *Sylvae* は彼に拠る作品集という色合いが濃い。ドライデンの翻訳のうち、ローマの詩人からは、ウェルギリウス (Vergilius, 70-19 BC) が3編、ルクレティウス (Lucretius, c.99-c.55 BC) が5編、ギリシアのテオクリトスが3編、そして、ローマのホラーティウスが4編選ばれている。また、ホラーティウスの内訳は、オード (Odes) が3編、エポード (Epodes) が1編である。

ホラーティウスの『エポード集』は、全体では長短17の詩からなる作品集であるが、ドライデンが採り上げたものはその第2歌であった。この第2歌は、文学史的に言えば、イギリスの17・18世紀にあって、田園の生活を賛美するという風潮を、ウェルギリウスの『農耕詩』(特に、第2歌458-474)²とともに、促したとされる詩である。しかし、この詩の中で歌われる田園賛美の実体は、多くの英訳において描かれるような、いわば単純化されたものとは違う局面を有しているように思われる。仔細に検討してみれば、また違った面が見えてくることが予測される。ドライデンはそのようなホラーティウスをどのように翻訳したか、何処にその翻訳の特質は存するか。また彼の翻訳の特質

2 Vergilius, *Eclogues, Georgics Aeneid I-VI*, ed by H. Rushton Fairclough (The Loeb Classical Library, revised ed. 1978), p. 148. なお第2歌の490行目 'felix, qui potuit rerum cognoscere causas' などにも形式面での類似が認められる。

は何に起因しているか。それを明らかにすることが本論文の控えめな意図であり、希望である。そのためには、ドライデンの翻訳を考察する前段階として、まずホラーティウスのエポードの第2歌を仔細に検証し、この詩がいかなる歌であるかを確認したい。その上でドライデンの翻訳の特質を詳らかにすることに移りたい。そして、もしもホラーティウスとの差異が認められるとすれば、その差異の因って来る原因を探ることが次の問題となるであろう。そのためには、まずエポード第2歌の英訳の歴史に目を向け、翻訳の文脈の考察を通して、ドライデン的な翻訳の由来を解明する努力も必要となるであろう。またドライデンが翻訳を公表した1684年という、特定の時代背景の中にドライデンを置いて考察した後に、我々の結論を述べることにしたい。このような研究は筆者の知る限りなされてはいないと思われる。解明を試みる所以である。

1 Epode IIはどのような詩であるか

エポードの第2歌は全体で70行からなる詩であるが、構成的には巻頭から第66行までの部分と、それに続く4行（結び）の二つの部分に分けることが出来る。エポードの大部分を占める66行までの前半では、都会に住む金貸しのアルフィウス（Alfius）——彼の名前と金貸しという職業は、結末近くの67行目になってやっと判明するのだが——が田舎の生活の楽しみのあれこれを想像し、田舎に移り住もうと考える部分を構成している。彼の考える甘美な田舎生活の想像は以下のように始まる。

“Beatus ille qui procul negotiis,
 ut prisca gens mortalium,
 paterna rura bobus exercet suis
 solutus omni faenore,
 neque excitatur classico miles truci, 5
 neque horret iratum mare,
 Forumque vitat et superba civium

potentiorum limina.³

Epode, II, 1-8.

(仕事を離れて、昔の人々のように、父祖の田畑を自らの牛で耕し、全ての借金から解放されている者は幸せである。ラッパの召集の音に、兵士として煩わされることもなく、怒れる海を恐れることもなく、広場や貴顕の権力者の豪勢な門を避ける者は。)

エポード第2歌の韻律は基本的に短長 (iambus) が基調になっている。最初に短調三歩格 (iambic trimeter) の行が配され、やや短い短長二歩格 (iambic dimeter) の行がそれに続いている。このような2行が連句をなし、全体を構成している。この韻律の点は、後でベン・ジョンソンの英訳を考察する時にもまた触れるが、ここではこれ以上は触れないことにしたい。語り手はまず、田舎の生活の安楽を語る。都会から離れ田舎で父祖伝来の田畑を耕す者は幸せだという。prisaca gens は、昔の黄金時代の人々のように、という含意を含んでいる。そして金銭の問題に頭を悩ます必要の無いという点を持ち出して来る。(この点は、結末部 67 行目で、このように語っている人物が Alfius であり、彼の職業が金貸しであることも関係しているだろう。)[ラッパの召集の音に、兵士として煩わされることもなく][怒れる海を恐れることもなく]とは、兵士として働くこともなく、陸戦にも海戦にも引っぱり出されることのない、田舎の生活を意味していると考えられる。([怒れる海を恐れることもなく]とは、

3 C.E. Bennett, ed., *Horace, Odes and Epodes* (The Loeb Classical Library, revised ed, 1978), p. 364. 以下、引用はこの版に拠る。なお、Alexander Pope (1688-1744) が“On Solitude”の中でこの2行を借用したことはよく知られている。

Happy the man whose wish and care

A few paternal acres bound

—Alexander Pope, “On Solitude”, 1-2.

或いは商人として海に乗り出し難破の危険を冒す必要のないことをいっているとも考えられるが⁴。) また広場 (Forum) には裁判所があったのだが、このように田舎に生活し法的な事件に煩わされることもなく生きる者は幸福である、という。そしてこのように田舎暮らしを称揚する語り手は、都会に住む金貸しの *Alfius* であり、これらのことは彼の想像であることが、読むにつれて次第に明らかになってくるのであるが、そのような設定を明らかにすることなく、ホラーティウスは *Alfius* に田舎暮らしの魅力を列挙させるのである。

Alfius の想像は更に続く。彼は葡萄の木の手入れにも思いを馳せる。

ergo aut adulta vitium propagine
 altas maritat populos, 10
 aut in reducta valle mugientium
 prospectat errantes greges,
 inutilesque falce ramos amputans
 feliciores inserit,

Epode, II, 9-14.

(また、そのような状態で、葡萄の木をよく育った若木を高いポプラの木に結婚させ、また遠くの谷に、モーモーと啼き、さまよっている牛の群れを眺めたり、また鋏で無用な枝を剪定し、有用なものを接木する。)

この部分でも *Alfius* の想像は続く。都会の喧騒を離れて、そのような状態で (ergo)、まず田舎での仕事として葡萄の木をポプラの木の支柱に「結婚させる」のは楽しい、と言う。また放牧している牛の群れが遠くで啼いているのを眺めるのも楽しい。そして更に *Alfius* は、葡萄の木の不要な枝を切り落とし、そ

4 David Mankin, ed., *Horace, Epodes* (Cambridge Greek and Latin Classics, 1995) p. 67. なおコメンタリーとして、これ以外に Paul Shorey, ed., with introduction and notes, *Horace, Odes and Epodes* (Benj. H. Sanborn & co., 1919) や Charles E. Bennett, ed., *Horace, Odes and Epodes* (Aristide D. Caratzas, Publisher, College Classical Series, New Rochelle, New York, Exact reprint of the original edition, rep. 1992) などを使用した。

してそこに豊かな実りをもたらすであろうものを接木している自分の姿を想像するのである。第1行から読み進んできた読者は、田舎の生活の楽しさを読み取るであろう。別段問題の無い表現となっている、と一応は感じるであろう。

ところが、仔細に検討してみれば問題がない訳ではない。Alfius はまずポプラの木を支柱として、葡萄の木をそれに結びつける仕事を語る。コメンタリーの教えるところに拠れば、葡萄の木の支柱としてポプラや榆の木が最適のものであるようだ⁵。そして次に、放牧している牛の群れが遠くの谷で啼くのを見る楽しさを思い浮かべる。そして次に、葡萄の木の無駄な枝を剪定し、沢山の实りを付けるであろう「より幸せな *feliciores*」枝を接木する。一見なんでもない田舎の労働のように見えるのだが、しかしそれほど単純なことではなさそうである。葡萄の木の作業は季節的には春に行う仕事であり、そして牛の放牧は夏の仕事である⁶。そうすると、ここで Alfius は春の仕事である葡萄の仕事を想像し、夏の牛の仕事に移り、また想像は春の葡萄の仕事に戻っていることになる。

このような順番になっている理由は何であろうか。もしも、Alfius が春に行われる2種類の葡萄の木に関する労働を連続して想像したとしたら、その方がはるかに自然であるように思われる。まず春に行われる2種類の葡萄の仕事を連続して想像し、次には夏の牛の放牧という仕事を思い浮かべる、という順番であれば、その方がはるかに、春から夏へという季節の労働の順番に合致していることになろう。しかし、実際にはそうはなっていない。なぜこのような順番なのか。順番に問題はないであろうか。この不自然な順番は、田舎の生活を想像している Alfius が田舎の生活を実はよく知らないのではないか、という思いを起こさせる。或いは、詩人ホラーティウスは Alfius に田舎の生活を賛美させながらも、実は彼自身は田舎の生活を実際には、知らなかったのだ

5 David Mankin, p. 70.

6 David Mankin, p. 70.

はなかろうか、という可能性をも思わせる。また別の可能性も考えられそうである。つまり、ホラーティウス自身は田舎の生活をよく知っていたにも拘らず、ここでは *Alfius* を田舎の生活の知識がないような人物として描いている、という可能性である。ともあれ、この *Alfius* の想像の順番には若干の不自然さがあり、そこから、一つの違和感が生まれてくるように思われる。または不調和感が生まれることは否めないように思われる。この不調和感は、(引き続いて更に詳しく考察するが)、エポードの極く初めの部分においては些細な問題と見えるかもしれないが、決して小さな問題ではなさそうである。しかし、ここでは、この違和感の存在を指摘するに留めておきたい⁷。

このような不調和感は、このエポードを読み進めるにつれて、更に深まるように思われる。葡萄と牛の放牧の仕事の次には、田舎の楽しみとして定番ともいえる蜂蜜と羊の毛の刈り取りが描かれる。

aut pressa puris mella condit amphoris, 15

aut tondet infirmas oves;

Epode, II, 15-16.

(下線は筆者)

(また、清潔な壺に(蜂の巣から)集められた蜜を蓄え、また、若い羊の毛を刈り取る。)

ここでは蜂蜜の楽しみと羊の毛を刈り取る仕事が描かれている。しかし、この2行でも以前と同様に、不調和感が感じられる。*Alfius* は蜜を *amphora* に蓄えることを想像している。しかし通常 *amphora* に蓄えるものは葡萄酒や水である。あるコメンタリーによれば、農事を論じた詩人達の中で、蜜を *amphora* に蓄えると書いた古典作家は他に誰もいないのである⁸。ここでもま

7 以下に論じるように、Dryden を初めとする多くの訳者は、このような違和感に敏感に反応した。そして原典の順番を入れ替えたのだが、その問題は以下において詳述する。

8 David Mankin, p. 72.

た、Alfius は（或いはホラーティウス自身が）田舎の生活について無知であったのではないか、という疑念を抱かせるように思われる。またここで、形容詞 *puris*（純粋な）は文法的には *amphoris*（壺）を修飾している。しかしながら、読者は、この形容詞 *puris* (*purus*) は *transfer* されていると理解して、*pura mella*（純粋な蜂蜜）と読むのではないかと想像される。つまり、読者は、本来は「純粋な蜂蜜」と描かれるべきものが、韻律の関係で、このような表現になっている、と先回りして考えるのではなからうか。そのような読み方も、この部分に関する限り、一応は納得が行くように思われ、文法はさておき、*pura mella*（純粋な蜂蜜）のように読むのが寧ろよいのではないかと思われてもくるのだが、果たして本当にそうであろうか。

ここでは、文法的には *puris amphoris* と書かれている以上、この読み方を検討してみることも必要であろう。文字通りに読めば、純粋なのは蜂蜜ではなく壺ということになる。その場合には、*puris* (*purus*) は「純粋な」という意味よりも寧ろ「清潔な」という意味に解しえるであろう。英訳のなかでも直訳的な翻訳を志向している訳者は、文字通りに解釈している。例えば、Christopher Smart (1722-71) は ‘or stores his honey, pressed [from the combs], in clean vessels’ と訳している⁹。このような読みも一応は可能であろう。しかし、その場合、よく考えてみると、この表現からは僅かな皮肉が感じられるようにも思われるのである。つまり、「純粋」（清潔）なのは蜜ではなく、それを入れる容器であるのだから、ちょっとした期待外れも感じられるのである。そのように考えてくれば、ここでも違和感は明らかであろう。このような

9 Christopher Smart, tr. *The Works of Horace*, revised with a copious selection of notes, by Theodore Alois Buckley (London, George Bell & Sons, 1888), p. 115. なお Michael Oakley も ‘or stores in spotless jars the honey he has pressed’ と訳している。Cf. *Horace, Collected Works* (Everyman’s Library, 515, 1967), p. 118. 因みに John Marshall に拠る Everyman’s Library 旧版も同様である。Cf. “Draws the new honey, in pure jars to keep” (l. 15) John Marshall, ed., *Horace, Complete Works* (Everyman’s Library, 1st ed. 1911, 1953), p. 113.

不調和な感じはこのエポードの中で常感じられるのである。

このような不調和感は初めは僅かに感じられるものであるが、読み進めるにつれて次第に明瞭になるように思われる。Alfius は引き続いて、田舎の愉快的生活の想像を重ねる。今度は古典的な「心地よい場所 *locus amoenus*」というトポスを持ち出して来る。

libet iacere modo sub antiqua ilice,
 modo in tenaci gramine.
 labuntur altis interim ripis aquae, 25
queruntur in silvis aves,
 fontesque lymphis obstrepunt manantibus,
 somnos quod invitet leves.

Epode, II, 23-28. (下線は筆者)

(ある時は古い榿の木の下で、またある時は厚い草の上に横たわることが楽しい、その間にも、水は高い堤防の中を滑る、鳥たちは杜の中で悲しい声で鳴き、そして、泉は流れ出る清水で叫び立てる、それが穏やかな眠りを誘うだろう。)

ここで歌われる情景は、古来より歌われて来た「心地よい場所」のトポスそのものと思われるものであろう。榿の木の下や、寝心地のよさそうな草の上に横たわり、河は穏やかなせせらぎの音をたてて流れ、鳥は囀り、泉からの水音も穏やかで、それは眠りを誘う、という。如何にも穏やかな田舎の情景のように見えることは確かであるのだが、他の部分と同様に、それだけではなさそうである。

まず、榿の木陰、生い茂る草の上という気持ちのよい場所を設定し、次に「水は *altis ripis* において滑る」と語る。この文脈において、河の堤自体は普通の高さであると考えられるので、*altis ripis* の意味は、高い堤、つまり水面から見て堤が高く見えるほど、水面が低くなっている状態を指していると考えられるだろう。或いは、*altis ripis* を「深い堤」と理解しても事情は同じであ

ろう。「深い」とは上から見て、水面が下の方にあること、水が低いことを指しているだろう。つまり、夏の季節に、低い水位の河が穏やかに流れてゆく、ということを行っている、と読者は理解するであろう。Richard Bentley (1662-1742) もそのように理解しているようである¹⁰。ところが、問題はそれほど簡単ではない。このラテン語の表現を、先入観を持たずに読めば、別の読み方の方が寧ろ自然であるように思われてくる。つまり、この場面が「心地よい場所 *locus amoenus*」の描写であるという偏見を持たずに読めば、この堤は違った様相を呈して来るのである。つまり、普通の読みに従えば、堤 (*ripa*) は「高い堤の中を」となるであろう。Paul Shorey は Quintilianus (C.35-100 A.D.?) が、同じような表現において、*altis ripis* を「高い堤」という意味で用いている事例を紹介している。以下の通りである。ut vis anmum maior est altis ripis multoque gurgitis tractu fluentium, quam tenuis aquae et obiectu lapillorum resultantis¹¹。では「高い堤の中を」水が滑る、とはどういう意味であろうか。この気持ちのよい川辺において、堤自体が高いということはない。すると、「高い」ということは心理的な高さのことであり、よって「水面が高い」ということを意味している。つまり、河の水かさが増しており、水面は上昇し今にも溢れんばかりになって、水は流れていることを意味することになる。Everyman's Library 新版の英訳は比較的直訳を心がけているように思われるのだが、当該の箇所は次のように訳されている。

While rivers glide along between their brimming banks

And birds pipe sadly from the woods,¹²

(下線は筆者)

10 Paul Shorey, p. 481 に言及されている。

11 H. E. Butler, ed., *Quintilian, IV* (The Loeb Classical Library, 1979), XII, ii, 11, p. 388 cited in Paul Shorey, p. 481. 意味は、「川の勢いは堤が深く流れの水量が多いときの方が、低い水位で石が逆らうようにある時よりも強い」であろう。

12 Lord Dunsany, Michael Oakley (Everyman's Library, 515, 1967), p. 118.

そのように理解すれば、*altis ripis* とは、「水が溢れそうな堤」となる。そのような場所では、*Alfius* はのんびりと眠ってはいられないことは自明であろう。

また、杜の中の鳥の囀り '*queruntur in silvis aves*' も問題となる。一見すると、この一行は「杜の中で鳥たちが囀っている」と述べていると理解されよう。ところが、ここでも不調和感が感じられるのである。ここで一応「囀る」と理解した動詞 *queruntur* (*queror*) の意味が問題なのである。この語の意味は、単に鳥が「囀る」ことを意味しない。元来の意味は、'*to complain, lament, bewail*' ということである¹³。鳥たちは単に囀っているのではない。「哀しい不平の声を挙げている」のである。その点で、上に引用した *Everyman's Library* 新版は言語的に正確である。*Alfius* ではなくとも、このような場所では安穏と眠ってはいられないことは明らかであろう。(それとも、金貸しの *Alfius* がそのような、鳥の哀しみの声などにはまったく不感症であるとするならば、それはホラーティウスの痛烈な皮肉であろう。)

そして、同様に、泉の描写も問題である。「泉は流れ出る清水で叫び立てる」*fontes lymphis obstrepunt manantibus* という。ここでも動詞 *obstrepunt* (*obstrepo*) の含意に注目しなければならない。読者はこの行において、動詞の直前にある「清水によって」*lymphis* という表現によって、泉から清水が穏やかに溢れ出る様を想像するであろう。しかし、動詞の意味を正確に理解するとき、その想像が錯覚であることに気づかされるのである。つまり、動詞はそのような理解を不可能にしている。なぜなら、動詞 *obstrepo* は第一に '*to make a noise against or at; to roar or resound at*' (*Lewis & Short, A Latin Dictionary*) という意味をもっており、更に四番目には '*to annoy, molest, be troublesome*

13 Charlton T. Lewis and Charles Short, eds. *A Latin Dictionary* (Oxford, Clarendon Press, 1969) 参照。'*queror*' を比喩的な意味で理解することは可能であると思われるが、ホラーティウスの語り口を考慮する時、この単語が醸し出す違和感は拭い切れないと思われる。

to' という意味を持つ単語なのである。それ故、清水の流れ出る様が穏やかであるはずはない。それは次の例によっても判明する。

ホラーティウスのオード第3巻の最後の歌（第30歌）は、「私は青銅よりも永続し、王の建物ピラミッドよりも高い記念碑を作った」という言葉で始まっている¹⁴。オード集の最後に置かれて、この詩集の出版に関して並々ならぬ自信を表白したものとして、知られている。第3巻の30歌の中では、動詞 'obstrepo' は明らかに「騒々しい音をたてる」という意味で使われている。'qua violens obstrepit Aufidus'（そこでは、荒々しいアウフィドゥス河が騒々しい音を立てている。Ode, III, xxx, 10）このように、ホラーティウス自身が、'obstrepo' を「騒々しい音を立てる」という意味で用いているのである。このような音を立てる河の傍らでは、Alfius は穏やかな眠りに誘われることはないであろう。手短に纏めていえば、ホラーティウスは、表面上では、川縁で寝そべる風景を「心地のよい場所」に見立てて、賛美するように見せかけながら、他方においては、これを揶揄しているのである。ホラーティウスがこのような巧みな言葉遣いをする詩人であることは、記憶されなければならないであろう。要するに、以上の6行には、先に見た他の個所と同様に、表面の意味とは別に、裏の意味も隠されているのである。そして、表面上の読みとは別の読み方も可能であり、その読み方の可能性の存在が、全体に不調和な感じを描出している、ということであろう。この点は忘れてはならないように思われる。

そのようなホラーティウスの語りの特徴は、Alfius が冬の楽しみを想像する場面において、より明確に看取できるように思われる。草の上に寝そべる愉しみに続いて Alfius は以下のように冬の楽しみに思いを馳せる。

14 Exegi monumentum aere prennius
regalique situ pyramidum altius,
—The Loeb Classical Library に拠る。

at cum tonantis annus hibernus Iovis
 imbres nivesque comparat, 30
 aut trudit acris hinc et hinc multa cane
 apros in obstantes plagas,
 aut amite levi rara tendit retia,
 turdis edacibus dolos,
 pavidumque leporem et advenam laqueo gruem 35
 iucunda captat praemia.

Epode, II, 29-36. (下線は筆者)

(そして雷鳴を轟かすゼウスの冬の季節が、雨を、そして雪を引き起こす時が来ると、あちらへ、こちらへと多数の犬で凶暴な野豚を、待ち構えている罠の中に駆り立てる。また滑らかな又木¹⁵に目の粗い網を、大食のツグミに罠を、拡げる。臆病な兎を、また渡り鳥の鶴を罠で、愉快な獲物を、捕まえる。)

田舎において、冬には冬の楽しみがあり、それらの楽しみを *Alfius* は次々に想像して愉しむ。まず彼は狩の楽しみを思い描く。多くの猟犬を使い野豚を罠の中へと駆り立てる。また網を用いて大食のツグミを捕らえたりもする。以上の楽しみの最後として、兎や鶴を捕らえることを思い浮かべる。兎を捕らえることを想う 35 行目は、内容に対応するように韻律上の工夫もされている。このエポードの韻律は基本的に、長い短長 3 歩格と短い短長の 2 歩格の 2 行の連句から構成されていることは、既に指摘した。ところが 35 行目は（許容できる範囲内で）ややその規則性が破られている。この行の韻律は、長短を記せば、 $\underline{\text{U}}\underline{\text{U}}-\underline{\text{U}}\underline{\text{U}}\underline{\text{U}}\underline{\text{U}}-\underline{\text{U}}-\underline{\text{U}}-\underline{\text{U}}\underline{\text{U}}-\underline{\text{U}}-$ *Pavidumque leporem et advenam laqueo gruem* と考えられる。つまりここで使われているリズムは、基本的な短長のリズムではなく、短短長格 (anapest) が 2 回と短短短格 (tribrach) が 1 回使われているのである¹⁶。これ

15 *amite levi* の韻律は長短短長長と考えるのが妥当と思われるので、*levi* (*levis*) は *smooth* の意に理解した。

16 *laqueo* は、母音融合 (*synizesis*) によって、短長 (2 音節) と読むこと、すなわち $\underline{\text{U}}\underline{\text{U}}-\underline{\text{U}}$ *laqueo* と考えることは不可能ではないと思われるが、ここではそれは取らない。

によって、足早に逃げ惑う兎の様態を活写しようとしていることは、容易に想像されるところであろう。そして、それらは「愉快的獲物 *iucunda praemia*」とされている。

一見すると、29～36行の描写はありふれた冬の田舎の楽しみを、巧みな韻律で描いているように見える。読者は恐らく、このように描写される冬の楽しみを読み、最後に描かれる兎の部分に見られる詩的な技巧を賞賛するであろう。しかし、それだけではない。というのも、鶴 (*grus*) に関して次のような事実が、ホラーティウスの語りの中に隠されているからである。上の引用においては、冬の楽しみが羅列されており、鶴の捕獲も、当然ながら冬の楽しみの一つとされている。しかし、鶴は実は冬に渡ってくる鳥ではなく、夏にイタリアに飛来する渡り鳥であるという事実を知るとき、読者は安穏と *Alfius* と共に冬の楽しみに浸っていることは出来なくなる。鶴は夏の渡り鳥なのである。そのことをプリニウス (*Gaius Plinius Secundus*, AD23/4-79) ははっきりと以下のように書いている。 *Ciconiae quoniam e loco veniant aut quo se referent incompertum adhuc est. e longinquo venire non dubium eodem quo grues modo, illas hiemis, has aestatis advenas.*¹⁷ 「コウノトリが何処からやって来て、またどこへ去るのかは今まで知られていない。鶴と同じように、遠くからやって来ること、前者(コウノトリ)は冬に、後者(鶴)は夏に渡ってくることに疑いはない」。またコメンタリーの教えるところでは、鶴に関する言及は多くの古典詩人にみられるようである¹⁸。例えばウェルギリウスは『農耕詩』第1歌の120行目において、夏季にストリュモン河に謂集する鶴に言及している¹⁹。また、同歌306行目においても、鶴に言及がある。このように、鶴が

17 Pliny, *Natural History*, III, *Libri viii-xi*, ed. H. Rackham (The Loeb Classical Library, 1947) X: 61, p. 330.

18 David Mankin, p. 78.

19 Vergilius, *Eclogues, Georgics Aeneid I-VI*, ed. by H. Rushton Fairclough (Harvard UP, The Loeb Classical Library, revised ed. 1978), p. 88. また H. H. Huxley は *Georgics IV*, 120 行に 'winter's approach drove Thracian cranes via

夏の渡り鳥であり、この部分に明白な誤解があることは明らかなのである。このように、鶴に関しても、他の部分において感じられる違和感、不調和感が感じられるのである。

さて、鶴に関する事実の誤解をどのように考えたらよいのであろうか。誤解しているのは作者であるホラーティウス自身であらうか、それとも、Alfius であらうか。ホラーティウスは、パトロンであるマエケーナース (Maecenas) から多大の恩恵を受け、特に Sabine の田舎の別荘をプレゼントされたことはよく知られている。そのことをホラーティウスはオードの第 1 巻第 9 番の詩の中で感謝している。サビーニーの別荘での生活などから、ホラーティウスが田舎の暮らしについて、ある程度以上の知識を有していたことは、ほぼ確実であらう。

以上のような事情を考慮すると、鶴の飛来に関して、作者ホラーティウス自身が事情を誤解していた、とは考えられないと思われる。とすれば、誤解の実体は、ホラーティウス自身がそのような誤った想像を Alfius にさせている、ということである。ホラーティウス自身が誤解していたのではなく、Alfius に間違ったことを述べさせているのである。そして、特に鶴について、advenam ... gruem (渡り鳥の鶴を) と表現していたことも注意されなければ

↘ Greece to Africa, as Lucan tells us...’という注を付けている。H. H. Huxley, ed., *Georgics, I & IV* (Bristol Classical Press, 1979), p. 82 参照。尚 Statius は *Sylvae* (IV, vi, 8-9) の中で「冬の鶴」に言及している。“quid Phasidis ales/distet ab hiberna Rhodopes grue, ...” (J.M.Mozley, ed., *Statius, I The Loeb Classical Library*, p. 242) このラテン語は「どれほどファーススの鳥(雉)がロドペーの冬の鶴から隔たっているだろうか」ということを意味している。ファーススは黒海に注ぐコルクスの川の名前であり、ロドペーはトラキアの山脈の名前である。ここでスタティウスは「冬の鶴」という言葉を用いているが、鶴は冬には南に去るため、冬の鶴は極めて珍味となることを述べるために使われている。Alfius はこのような事情を熟知した上で、それでもなお珍味を得ようとして「冬の鶴」を捕らえようとしているとは到底思われない。

ならない。つまり、ここでは鶴の「外国から飛来する渡り鳥」という一面がさりげなく、しかしはっきりと強調されているのである。それによって、確実に *Alfius* の誤解は読者に印象づけられるのである。

この詩においては、ホラーティウスは、一方において田舎の生活を賛美しながら、他方においては、同時に田舎の生活を揶揄している、と言ってもよいであろう。つまり表の声では田舎暮らしの楽しさを賞賛しながらも、同時に巧みな技巧によって、裏の声ではそれを否定してもいたとすることが出来るであろう。そして、全篇を通じて感じられる不調和感はこのような技巧に起因していたと考えられるのである。このようなホラーティウスの語りの技巧は変わることはない。

Alfius は更に続けて、自分の生活を更に充実したものにしてくれる妻がいたらどうだろうか、と想像の翼を拡げる。その様は次のように描かれている。

quod si pudica mulier in partem iuvet
 domum atque dulces liberos, 40
 Sabina qualis aut perusta solibus
pernicis uxor Apuli, ...
 claudensque textis cratibus laetum pecus 45
 distenta siccet ubera,
 et horna dulci vina promens dolio
 dapes inemptas adparet:
 non me Lucrina iuverint conchyliis
 magisve rhombus aut scari, ... 50

Epode, II, 39-42, 45-50. (下線は筆者)

(もしも、慎み深い妻が、家や可愛い子供達を、役割として、世話することが気に入る、丁度、サビーニー族の女性のような人か、また日に焼けた敏捷なアプーリアの女性のような人で、…編んで作った囲いの中に、跳ね回る羊を追い込んで、漲った乳房から乳を搾ったり、そして、今年の葡萄酒を清潔な樽から取り出して自家製の宴を用意したならば、決して、私を、ルクリーヌスの牡蠣も、鰯もベラも、より以上に喜ばせることはない

だろう。)

この部分は、一応は仮定文となっている。39 行目から 48 行目までが条件節 (protasis) を構成し、49 行目以下が帰結節 (apodosis) を成している。そして *Alfius* は、上の引用に描かれるように、優しくて気配りもこまやかで、よく働く、そんな女性がいたら、外国産の珍味である牡蠣も、鰯もベラも、あまり喜びとはならないであろう、と言うのである。一応は仮定文となっているとはいうものの、読者はこれを仮定として理解する者はいないであろう。田舎暮らしの楽しみという雰囲気にとわれている読者は、この仮定文も、肯定の表現の変奏の一つとして受け取るであろう。つまり、このような女性が当然存在するものと考えよう。仮定文であることを意識させないほど、それほど巧みに描かれているといえよう。しかし、もしも、このような女性が存在しなければ、当然のことながら、田舎暮らしもそれほど楽しいものではないことは明らかであろう。

ここでも、また不調和な感じは読み取れるのである。まず、この勤勉な女性は日に焼けている (*perusta solibus*) という。しかし、コメンタリーによれば、当時においては、たとえ奴隷の女であっても、畠の仕事をすることはない、という²⁰。その点にまたしても事実の誤認がある。また美的な感覚は時とともに場所によっても異なるとはいうものの、日焼けした女性があまり魅力的でなかったことは、これまたコメンタリーが教えるところである²¹。また「敏捷な *pernicis* アープーリアの女のように」というのだが、「敏捷な」という形容詞 *pernix* は、David Mankin が言うように、畠の仕事をする女性には相応しくない形容詞であろう²²。また、この「敏捷な」女性は、戻って来た羊を囲いの中に入れて、そして乳を搾るという。が、この仕事もまた女性が行う仕事では

20 David Mankin, p. 80

21 David Mankin, p. 80

22 Theocritus, Ovidius や、Juvenalis にもその例が見られる。David Mankin, p. 80 参照。

なかったのである。つまり、Alfius は女性の仕事について、まったく間違った想像をしているのである。そして、彼に間違った想像をさせているのは作者のホラーティウスであることは、言うまでもないのである。ここでも作為的な違和感の存在が指摘できるのである。

47 行目の葡萄酒の描写に関しても同じ指摘ができる。ここでは、「今年の葡萄酒を清潔な樽から出して」その「敏捷な」女性が食事を準備してくれるだろう、という。文法的には「今年の」horna は「葡萄酒」vina を修飾し、「甘い」dulci は「樽」dolio を修飾している。この修飾・被修飾の関係を尊重して訳せば、上の日本語のようになるであろう。(dulci の後の ceasura を尊重すれば、これが正統的な読み方ということになるかもしれない。) しかし恐らく読者は、「甘い」dulci は実は、形容詞としては、転移 (transfer) されていて、その直後に置かれている「葡萄酒」vina を修飾していると考えて、「芳醇な葡萄酒」と読むであろう。また「今年の葡萄酒」とは、「新鮮な葡萄酒」を意味していると解するであろう。一応はそうように読めるであろう。

しかし、ここでも非常に解りにくくはあるが、微かな不調和感が存在するのである。ここで酒は樽に dolio (dolium) 貯蔵されている。しかし、伝統的に葡萄酒は発酵が始まるまでは dolium に貯えられるが、発酵が始まるとアンフォラに移し変えられるのが一般的であるという²³。とすれば、「この妻が dolium から葡萄酒を注ぎだす」という表現からは、微かな違和感が感じられるのである。そして、この違和感は、「今年の葡萄酒」なるものは、実はまだ発酵が始まっていない葡萄ジュース状態のものを指しているのではないか、という想像をさせるのである。(このジュースは、発酵以前の、文字通り「甘い」ものかもしれない。) 葡萄酒についても、他の事柄と同様に、読者はホラーティウスの表の声だけに騙されてはならないのである。つまりこの表現は、例によって田舎暮らしを讃えており、よい妻に恵まれて、その妻がなにくれとなく

23 Paul Shorey, p. 483.

気配りを欠かさず、芳醇な葡萄酒付の食事を用意してくれるというのであるが、一方、裏では、その田舎暮らしに否定的な見方を提示してもいるのである。この日焼けした妻が、葡萄酒づくりに精通しているとは到底思われぬ。つまり表の声では田舎暮らしを賛美し、裏の声ではそれを揶揄しているのである。このような技巧はエポード第2歌の全篇を通して一貫していると言えるのである。

Alfius はこの後にも、色々と田舎暮らしの楽しみを想像し続ける。アフリカからのほろほろ鳥もイオニアのライチョウも、イタリアの田舎の豊かな産物を差し置いて愛好する気にはなれない、と言う。そのようにして、Alfius の想像は 66 行で終わりとなる。そして結末に於て次の 4 行が結びとして付けられている。そこでは、田舎暮らしが、裏の声ではなく、表の声で否定されている。

haec ubi locutus faenerator Alfius,
iam iam futurus rusticus,
omnem redegit Idibus pecuniam,
quaerit Kalendis ponere.

70

Epode, II, 67-70.

(このようなことを高利貸のアルフィウスは語り、今や今や田舎人になろうとし、全てのお金を中日に回収した。朔に貸し出すのだ。)

ここに至って、66 行目までが、Alfius の田舎生活についての想像であることが最終的に判明する。しかも彼は高利貸 (faenerator) なのである。その彼が田舎の生活に慣れて、金貸しを廃業しようとする。Idus (Idibus) は月の中日のことで、決済日にあたっていた。この日に既に彼は貸金を回収し終える。そして彼が田舎に行くだろう、と読者が予期している時に、彼はまた金を貸し出すのである。ここにどんでん返しがある。それは実質、最後の一行で行われている。最後の一行の前には、技巧的には接続詞もなく asyndeton となっており、それゆえ一層痛烈な皮肉が醸し出されている。このように、田舎の生活の

想像は最後において見事に裏切られる。それが所詮は幻想にすぎなかったことが明らかとなる。一般的には、田舎暮らしの幻想は最後になって裏切られる、と考えるようである。例えば、ホラーティウス研究の泰斗である Eduard Fraenkel は W. Y. Sellar の見解に全面的に賛成の意を表し、以下のように彼を引用している。‘… it is characteristic of Horace, when he is most in earnest, to check himself and bring himself back to the ordinary mood in which he meets society so he adds a satiric tag to the Epode, to prevent his being taken too seriously. The systematic enthusiasm with which he is carried away to celebrate the happiness of country life ... is disclaimed with “town-bred irony”.’²⁴ しかし、ここで注意しなければならないことは、Fraenkel が、ホラーティウスは最初から 66 行目までは Alfius に田園生活の楽しみを賛美させ、最後の 4 行 (67-70 行) で、それを逆転させている、と考えていることである。Fraenkel は、1 行から 66 行という経過を経て、語りの時間的な展開の最後において逆転が起こると考えている。語りの最後に、いわば落ちとして逆転が用意されていると考えるのである²⁵。

しかし、既に指摘したように、このようなホラーティウスの意図は、同時に存在していたと考える方が、寧ろ適切であると思われる。ホラーティウスは、表の声では田園生活を賛美しながら、同時に、裏の声では、それを揶揄していたのである。エポードの第 2 歌の語りには、そのような技巧が使われていたのである。このようなホラーティウスの語りの技法は (これまで指摘されては来なかったようだが) 記憶されるに値するように思われるのである。

24 W. Y. Sellar, *Horace and the Elegiac Poets*, 2nd ed. p. 130, cited in Eduard Fraenkel, *Horace* (Oxford, Clarendon Press, 1957, special ed., 1997), p. 61.

25 このような考えは 17 世紀後半のフランスにおいても見出される。André Dacier は *Remarques critiques sur les oeuvres d'Horace* (1684) の中で次のように述べた。‘‘Cette piece est un chef d’oeuvre en son genre ... on croit toujours que c’est Horace qui parle ... on ne sent le poison qu’à la fin’’ cited in H.A.Mason, ‘Dryden’s Dream of Happiness,’ *The Cambridge Quarterly*, vol 8, no 1, p. 24.

2 Dryden の翻訳の特質は何処に見られるか

前章において、われわれはホラーティウスのエポード第 2 歌の内容と技巧とを見た。ではホラーティウスの田園の賛歌は、どのように 18 世紀末のイギリスにおいて、翻訳されたであろうか。以下に、主にホラーティウスの「違和感」、言い換えれば、表現の背後に感じられる、実に深い陰影に焦点を絞り、この詩がイギリスの 17 世紀の詩人ジョン・ドライデンによって、どのように翻訳されているかを検証することにした。

How happy in his low degree
 How rich in humble Poverty, is he,
 Who leads a quiet country life!
 Discharg'd of business, void of strife,
 And from the gripeing Scrivener free. 5
 (Thus e're the Seeds of Vice were sown,
 Liv'd Men in better Ages born,
 Who Plow'd with Oxen of their own
 Their small paternal field of Corn.)²⁶

Dryden, 1-9. (下線は筆者)

(なんと幸せであることか、低い身分にあって、なんと豊かであることか、貧しさの中にあって、静かな田舎の生活をおくる者は！ 仕事から解かれ、諍いも無く、そしてけちん坊の金貸しからも無縁である者は。(このように、悪の種が蒔かれる前に、よき時代に生まれた人々は生きていた、彼らは自身の牛で耕した、彼らの父祖伝来の土地を。))

まず、ドライデンは、エポードの翻訳にあたり、彼が使い慣れた弱強 5 歩格ではなく 4 歩格を採用していることが判る。基本的には弱強調 (iambic) を使

26 John Dryden, *The Works of John Dryden*, vol. 3, ed. Earl Miner and Vinton A. Dearing (University of California Press, 1969), p. 85. 以下、Epode 第 2 歌の引用はこの版に拠る。

っているのは、原典の短長 (iambus) を意識してのことでは、恐らくはないだろう。また、時にはライム (Rhyme) を使用しているが、それも必ずしも規則的なものではない。原典との著しい違いは、ドライデンの翻訳の仕方に現れている。以上に引用した 9 行は原典の 4 行に相当する。行数だけの単純な比較でも、2 倍以上になっている。ドライデンがホラーティウスを翻訳するにあたり、逐語訳的な正確さを求めていることは最初から明らかである。ドライデンの 1 行目と 2 行目は実質同じことの繰り返しである。3 行目までで一応、文は完結している。原文においてはそうではなかった。原文は——記憶を新たにするために、原文を拙訳で引用すれば、——「仕事を離れて、昔の人々のように／父祖の田畑を自らの牛で耕し、／全ての借金から／解放されている者は幸せである」であった。

原文と比較すれば、ドライデンの翻訳の目指す方向が明らかになってくる。ドライデンは原文の 4 行を二つの部分に分けている。最初から 5 行までの部分と、後半の 4 行である。前半で強調されることは、静かに田園の生活をおくる者は幸せだ、という命題である。父祖伝来の土地を自分の牛で耕す、ということは、丸括弧に入れられて後置され、いわば付加的な位置に格下げされている。力点は丸括弧以前の a quiet country life にあることは明らかであろう。丸括弧のこのような使用によっても、静かな田園生活を賛美したい、というドライデンの意図が容易に推測できるのである。

さて、ホラーティウスの原文において、違和感が感じられる箇所の一つに葡萄の木の描写があることは指摘した。その葡萄の木の部分はドライデンではどうなっているのであろうか。葡萄の木の作業は次のように描かれている。

But either to the clasping Vine
Does the supporting Poplar Wed,
Or with his pruning hook disjoin
Unbearing Branches from their Head,

And grafts more happy in their stead:
 Or climbing to a hilly Steep
 He views his Herds in Vales afar

Dryden, 18-24.

(抱きしめようとする葡萄の木を支えのポプラの木と結婚させ、また、剪定鋏で、実を結ばぬ枝を頭から切り落とし、そして代わりにより幸せな物を接木する。また小高い丘に登り、彷徨う彼の群れを遠くの谷に眺める。)

原文においては、葡萄の木にポプラの木の支柱を「結婚させる」仕事と、不要な枝を切り取り接木する仕事は、遠くの谷に徘徊する牛を遠望する場面によって分断されていた。葡萄の木の仕事が連続して描かれていない点に、たとえ微かではあれ違和感が感じられることを述べた。ところが、ここでは、葡萄の木の二つの仕事は連続して描かれ、それによって違和感は解消されている。ドライデンは仕事の順番を入れ替えることも厭わない。このような入れ替えによって、葡萄の木の仕事はより筋が通ったものになったと言えるだろう。(この点については後で更に触れたい。) というのも、ドライデンが翻訳において志向するものは、原詩の持つ陰影(違和感)ではなく、むしろホラーティウスが表の声で表明していた、田園生活の賛美——それはホラーティウスの一面でしかないのだが——であることが、仄かに想像できるのである。

そしてそのような予想は、原詩において違和感が感じられる部分のドライデン訳を検証する時に、確信へと代わるように思われる。例えば「(蜂の巣から)集められた蜂蜜を清潔な壺に蓄える」(原詩 15 行目)は以下のように訳されている。

Or Sheers his overburden'd Sheep, 25
 Or mead for cooling drink prepares,
Of Virgin honey in the Jars.

Dryden, 25-27.

(下線は筆者)

(また、毛の伸びた羊の毛を刈り取り、壺の中の純粋な蜂蜜の蜂蜜酒を清涼な飲み物として用意する。)

原詩の 15 行目 *aut pressa puris mella condit amphoris* は殆ど *golden line* ²⁷ であるが、そのような様式にはドライデンは注意を払わない。ドライデン訳では、「(蜂の巣から) 集められた蜂蜜」は蜂蜜酒 (*mead*) に変質し、清潔な壺と純粋な蜂蜜が醸し出す違和感は消失している。(そしてドライデンは *puris mella* を *pura mella* と理解しているのだろう。) また *of Virgin honey* にも注意したい。この蜂蜜は、H.A.Mason に拠れば、蜜蝋などの混入していない最高級の蜂蜜を意味し、当時のイギリスの貴族や宮廷人によって用いられていたものであり、それゆえに身近な存在であったようだ ²⁸。ドライデンは、馴染みの薄い古代ローマ的なものを 17 世紀イギリス的な、より身近なものとして翻訳している。こうして田舎の生活は、古代ローマのそれというよりも、17 世紀イギリス的な生活に変貌している。そして、原詩がもつ陰影や違和感・不調和感は、ドライデン訳においては解消するように描かれている。ホラーティウスの原詩のもつ、両面性のうち、その一面のみが描かれるという結果になっているのである。

このような傾向は、至るところに窺われる。一見すると「心地よい場所 *locus amoenus*」と思われる(しかし必ずしもそうではなかったのだが)川岸の近く、川音と鳥の囀りが混じりあい、心地よい眠りへと誘う場所は、次のように描かれている。

No God of sleep he need invoke,
The stream that o're the pebbles flies

27 R. Miles, *The Epodes of Horace*, (Newcastle upon Tyne, 1980), cited in David Mankin, p. 72.

28 H.A.Mason, p. 47.

With gentle slumber crowns his Eyes. 40
 The Wind that Whistles through the sprays
 Maintains the consort of the Song;
 And hidden Birds with native layes
 The golden sleep prolong.

Dryden, 38-44.

(眠りの神に祈願する必要もなく、小石の上を走る流れは、優しい眠りで彼の目を飾る。飛沫の中の鋭い風の音は歌の伴奏をする。そして隠れた鳥は生まれながらの歌声で、黄金の眠りを長引かせる。)

ここには元の詩に見られたような不安感はない。寧ろ、全てがあまりにも様式化され過ぎている嫌いがないわけではないと感じられる程の、田舎の賛美に満ちている。そのために、いささか綺麗にまとまり過ぎているようにも感じられるのである。このような場所ならば、心地よい眠りに誘われることは大いにあるであろう。

さて、冬の狩はどのように描かれているであろうか、続きを見てみよう。

Or spreads his subtile Nets from sight 50
 With twinckling glasses to betray
The Larkes that in the Meshes light,
 Or makes the fearful Hare his prey.

Dryden, 50-53. (下線は筆者)

(また、繊細な網を広げ、瞬く鏡で眼をくらし、罠の中で羽ばたく雲雀を捕らえ、また臆病な野兎を獲物とする。)

まず気づくことは、原典ではツグミ (turdus) であったものが、ドライデンでは雲雀に代わっていることである。その点も見過ごせない。ただツグミから雲雀に代わったというだけではない。それに伴って捕獲の仕方も変わっているからである。ドライデンでは、網と供に鏡を使用して捕まえる。このような捕獲

の方法は当時のイギリスの田舎において行われていた²⁹。ここでも、古代ローマ的なものはイギリスのものに変質している。それに伴って、田園生活は臨場感を増し、身近なものになっているのである。そして、問題の鶴は跡形もなく無視されているのである。これでは問題にしようがない。このように、原典において不安感を醸し出していた個所は、綺麗に一掃されてしまっているのである。

ドライデンにおいては、古代ローマ的なものの一部はイギリス的な物や様式にとって代えられている。そのような方法によって、田園はイギリスの田園に変貌したと言えよう。そして、またイギリス的な田園のイメージが前面に押し出されるにつれて、原詩のもつ違和感や不調和な印象は次第に薄らいでゆくように思われる。またドライデン自身が、その不調和感を払拭するように努力をしているように思われる。「日焼けした妻」の例を見てみよう。

But if a chaste and pleasing Wife,
To ease the business of his Life,
Divides with him his household care, 60
Such as the *Sabine* Matrons were,
Such as the swift *Apulians* Bride,
Sunburnt and Swarthy tho' she be,
Will fire for Winter Nights provide,...

Dryden, 58-64. (下線は筆者)

(しかし、もしも貞節で愉快的妻が彼の生活の苦勞を和らげるために、彼と家庭内の仕事を分かち、その女性はサビーニーの女性のように、その女性は機敏なアプーリア族の乙女のように、たとえ日に焼けて色黒であっても、冬の夜の為に、火を準備してくれたら、…)

ここでは大意においては、大体は原詩の意味をかなり忠実に翻訳していると言

29 H.A.Mason, p. 46

If she in pens his Flocks will fold,
And then produce her Dairy store, 70
With Wine to drive away the cold,
And unbought dainties of the poor;

Dryden, 69-72. (下線は筆者)

(もしも、彼女が囲いの中に彼の羊を追ひ込み、そして彼女の乳製品の食べ物、寒さを追ひ払う葡萄酒とともに、そして、貧しき者の自前のご馳走を用意したら、)

原詩において問題となった部分は見事に消えている。まず、奴隸であっても畠の仕事をすることはなかった。その畠仕事の部分は省略されている。また彼女が囲いの中の羊の乳を搾ることも、またないのだが、これは曖昧な表現に変更され、結果的に直接彼女自身が乳を搾るかどうかは判りにくくなっている。そして問題となった「今年の葡萄酒を清潔な壺から」用意するという部分も、その奇妙さは逐語訳に拘らないことで解消されている。「清潔な壺」も無く、あ

るのはただ「冬の寒さを追い払う葡萄酒」だけである。原詩の陰影は全く消え失せ、実に明瞭なメッセージを持った訳文となっているが、それは勿論、ホラーティウスの一面でしかないことは忘れてはならないであろう。このようにして原詩の極めて大切な側面は無視され、専ら強調されるのは、原詩の持っていた他の一面でしかない、田園生活の賛美なのである。こうして、原詩の1行目から66行目に互る *Alfius* の田園生活の想像は、ドライデンにおいては完全な田園賛美に終わっているのである。

このような、賛美の姿勢は結末まで変わることはない。結びを見てみよう。

This *Morecraft* said within himself;
 Rosolv'd to leave the wicked Town,
 And live retir'd upon his own;
 He call'd his *Mony* in:
 But the prevailing love of pelf, 100
 Soon split him on the former shelf,
 And put it out again.

Dryden, 96-102.

(これをモアクラフトは心の中で思い、邪悪な街を去り、自身の財産で田舎に暮らそうと決意し貸付金を回収した。しかし金銭に対する邪念が彼を以前の砂州で難破させ、そしてまた金を貸し出させた。)

Alfius という名前はここでは *Morecraft* に変えられている³⁰。彼が去ろうとする街は邪悪な町 (the wicked Town) である。彼が住んでいる街がこのような街ならば、去る方が好ましいことは言うまでもない。しかし、彼は金銭に対する愛着が捨てられず、田舎への引退の決意を放棄する。彼は最後には *pelf* に対する愛を捨てられず、またその金を (金貸しとして) 貸し出す、と書くのだが、

30 'Morecraft' は Francis Beaumont (1584-1616) と John Fletcher (1579-1625) による *The Scornful Lady* (1610) の中に出てくる金貸しの名前である。Cf. Earl Miner and Vinton A. Dearing, p. 298.

この場合、pelfの意味は“money, wealth, riches; now depreciatory: ‘filthy lucre’” (OED pelf, 3) ということであろう。つまり、ここでドライデンは「悪銭」に対して、あくまでも批判的なのである。高利貸しの Morecraft は一度は田舎への引退を考えるが、最後にはまた元の木阿弥で金貸しに戻る。その点ではホラーティウスと同じであるが、その語り方は大いに異なる。ドライデンにおいては、the wicked Town や pelf、また split という言葉遣いに見られるように、Morecraft の態度は語り手ドライデンによって、批判されているのである。つまり田舎に引退しない Morecraft の態度は、揶揄というよりも批判されているのである。‘the prevailing love of pelf’ という言葉遣いに、その事が感じられるのである。ホラーティウスの原典においては、結びの部分は言わば客観的な描写となっており、そこに込められた揶揄はあくまでも穏やかな揶揄となっていた。しかし、ドライデンにおいてはそうではない。田舎に引退しない Morecraft に対する、より直接的な批判となっているのである。このような形をとって、ドライデン訳は田園の生活の賛美に貫かれているのである。原詩の持つ、田園の生活に対する複雑な陰影、言い換えればアンビヴァレントな態度は、ドライデンにおいては一掃され田園の賛美によって纏め上げられている。この点に両者の大きな違いが存在しているのである。

ドライデン訳について以下のように纏めることが出来るであろう。ホラーティウスの原典においては、表面上は田舎の生活の賛美と思われたものの裏側には、同時にそれを揶揄する詩人の態度が見え隠れしていた。ホラーティウスは田舎の生活を賛美しつつ同時に、それに対して、穏やかではあっても、否定的な視線を潜ませていた。田舎の生活を肯定するように見せかけながら、穏やかに否定してもいたのであった。そのような詩人としてのホラーティウスはドライデン訳においては、まったく消失している。原典における行間の陰影はまったく消えてしまった。その点に著しい差異が存在している。

ホラーティウスに存在した、いわば表現における微妙な色調は、ドライデンに於いては完全に消え失せてしまった。ドライデンの田舎の生活を賛美する詩

行の中には、これを揶揄するような視点は存在しない。完全に田舎の賛美によって占められてしまったと言ってもよいであろう。このような違いが両者の間には存在する。とすれば、ドライデンは何故そのような翻訳をしたのであろうか。その原因についても考察がなされなければならない。彼は、何故このように、ホラーティウスを変質させたのであろうか。以下、二つの視点からその原因を探りたい。ひとつは、まずドライデンの翻訳をホラーティウス翻訳の歴史中で考察するという視点である。もう一つは、ドライデンが置かれていた、1684年前後のイギリスの状況から、この翻訳を考察することである。

3 Ben Jonson 以降の英訳の文脈の中で考える

ウェルギリウスの『アエネーイス』の翻訳に際してそうであったように、ドライデンは先行する英訳をよく研究していた。その意味で、ドライデンの英訳は単独のものとして突然に現れたものではない。ドライデンの翻訳の特徴を考察するためには、まずはイギリスにおけるホラーティウスのエポード翻訳の歴史を一瞥することが必要であるように思われる。まず、エポードの英訳の歴史に焦点を当てたい。エポードの英訳の始まりを、おおよそ16世紀の終わり頃に求めることは、それほど的外れではないだろう。この頃は、トマス・ロッジ(Thomas Lodge, c.1557-1625)³¹による散文訳が公表され、またベン・ジョンソン(Ben Jonson, 1572-1637)による韻文訳が現れた時期である。トマス・ロッジによる散文訳を目にすることは出来なかったが、幸いジョンソン訳は容易に手にすることが出来る。初めに、このジョンソン訳を取り上げることにしたい。

まずは巻頭の部分から見て行きたい。ジョンソンの翻訳の特徴を顕著に窺うことができそうである。Alfiusの想像はジョンソンにおいては、以下のように始まる。

31 Thomas Lodge は自由な散文訳を *Scillaes Metamorphosis*, (1589) という作品集の中で発表したようだ。Cf. *Ben Jonson*, edited by C. H. Herford, Percy and Evelyn Simpson, vol XI (Oxford, Clarendon Press, 1952), p. 108.

Happie is he, that from all Businesse cleere,
 As the old race of Mankind were,
 With his owne Oxen tills his Sires left lands,
 And is not in the Usurers bands:
 Nor Souldier-like started with rough alarmes, 5
 Nor dreads the Seas intraged harmes;³²

Ben Jonson, 1-5.

(古い時代の人間のように、全ての労苦から解放されて自分の牛で彼の先祖伝来の田畑を耕す者は、また高利貸しに縛られていない者は幸せである。また、乱暴な召集ラッパによって兵士のように急かされることもなく、また、海の荒々しい脅威を恐れなくてもよい者は。)

まず一瞥するだけで、すぐにジョンソンが原詩の形式に大きな注意を払っていたことが判るのである。原詩は、既に見たように、短長が基調であり、iambic trimeter と iambic dimeter の2行が連句をなすという形式であった。原詩のこのようなリズムをジョンソンが尊重していることは明らかである。長い行には基本的に短長の5歩格を用い、短い行には短長の4歩格を用いている。韻律もまた原詩のリズムを保持しようとしていることが判るのである。押韻は原詩にはないが、押韻を採用したのも、このような原詩の詩的なリズムを移し替えようという意図によってなされたものであろう。

ジョンソンの翻訳の態度はいわば、直訳調に近いものである。そのような彼の態度は以下の描写に最も顕著に何うことができよう。それは、冬にツグミを捉え、鶴を捕獲する場面である。その部分を記憶を新たにするために煩を厭わず再び引用しよう。

aut amite levi rara tendit retia,
 turdis edacibus dolos,

32 Ben Jonson, edited by C. H. Herford, Percy and Evelyn Simpson, vol VIII, (Oxford, Clarendon Press, 1952) p. 289. 以下引用はこの版に拠る。

pavidumque leporem et advenam laqueo gruem 35
iucunda captat praemia.

Epode, II, 33-36. (下線は筆者)

この部分は、冬の楽しみの描写であった。つまり、網を張ってツグミを捉えたり、兎や鶴を罾で捕まえることを描いている部分である。下線部の単語に注意したい。retia（網）は次行の dolos（罾）と同格となっており、tendit（拡げる）の目的語になっている。また、gruem（鶴）と praemia（獲物）も同様に、caputat（捉える）の目的語になっている。このような構成とこれらの単語の位置に注意しつつ、以下のジョンソン訳を読めば、ジョンソンの意図が自ずと明らかとなるであろう。ジョンソンが意味と韻律の両方において、出来るだけ原詩に忠実であろうとしていること——それは結果的に直訳的になるのだが、——がこの部分において、極めて明瞭に見てとれるのである。

Or straines on his small forke his subtile nets

For th' eating Thrush, or Pit-falls sets:

And snares the fearfull Hare, and new-come Crane, 35

And 'counts them sweet rewards so ta'en.

Ben Jonson, 33-36. (下線は筆者)

(彼の又木で彼の繊細な網を、つまり罾を大食のツグミ用に用意する。また小心な兎や、渡り鳥の鶴を、罾にかけ、素晴らしい獲物を捕らえたと思うのだ。)

ジョンソンは原詩と殆ど同じ位置に同じような単語を配置している。この点にジョンソンの意図が顕著に見て取れるのである。ジョンソンは原詩を、意味や韻律また単語の配置などにおいて、可能な限り正確に移し替えようとしているのである。そのことは、原詩は全体で 70 行からなっているが、ジョンソンの翻訳も 70 行からなっているという事実からも推測できるのである。(原典と

違わぬ行数で訳している英訳は筆者の知る限りジョンソン以外にはない³³。) ジョンソンがこのような翻訳を採用した背景には、ジョンソン訳がラテン詩と対訳で出版されたという事情も絡んでいるだろう³⁴。ラテン詩との対訳で出版されるという形態がジョンソンに影響を及ぼしていないということはないであろう。読者は当然、ラテン詩とジョンソン訳を読み比べるであろう。そして翻訳の出来具合を論評するであろう。当然ジョンソンはそのような読者を予想していたであろう。ジョンソンは直訳調で翻訳しながら、しかも押韻を採用するという困難な作業に果敢に挑戦し、成功しているように見える。そしてジョンソンは読者に出来栄を誇示しているようにも感じられるのである。

ジョンソンは基本的には直訳を志向している。直訳的に訳すことが妥当であるかどうか、問題があると思われる場合にも、基本的には直訳を採用しているように思われる。例えば、蜂蜜をアンフォラに蓄えるところ ‘aut pressa puris mella condit amphoris’ (15 行目) は ‘Or the prest honey in pure pots doth keepe’ (15 行目) と訳されている。puris (純粋な、清潔な) は一見 mella を修飾するように見せながら、実は amphoris に掛かっていることは既に指摘した。ここでは pure honey と訳してもそれは直ちに誤訳であるとは言えないであろう。しかしジョンソンは文法通りに、pure pots と訳している。また、pressa puris に見られる頭韻的な表現 (ホラーティウスには頭韻という感覚はなかったであろうが) を、ジョンソンは pure pots に生かしている。

そして、注意すべきことは、このようにまず第一に原典を直訳調で訳す中で、ジョンソンはホラーティウスの持つ、表の声とは別の裏の声にも気づいていたと思われることである。裏の声の存在に、直訳するという行為を通して気づい

33 若い頃のサミュエル・ジョンソンにこのエポードの翻訳がある。かなり直訳調であるが、行数までは一致していない。ただ、彼もまたこの葡萄の木の写真の順番については、原典よりも英訳の「伝統」に従っていることを指摘しておきたい。つまり、順番を入れ替えているのである。Cf. Samuel Johnson, *The Complete English Poems*, ed by J. D. Fleeman (Penguin English Poets, 1982), pp. 33-35.

34 C. H. Herford, Percy and Evelyn Simpson, vol. XI, p. 108.

たように思われるのである。その例を、「心地よい場所 *locus amoenus*」の描写の中に見ることが出来る。原詩において、川は心地よいせせらぎの音をたてて流れているかのような印象を与えていた。しかし、実際には、溢れる水をも連想させるような筆遣いがしてある個所であった。この部分をジョンソンは、*'Whilst from the higher Bankes doe slide the floods;'* (1.25) 「一方、より高い堤から洪水は滑り」と訳している³⁵。この英文を不注意な読者は（多くの読者はそうであろうが）「高い堤の中を川の水が滑るように流れてゆく」と理解するであろう。読者は、*flood* を洪水のような危険なものよりも、寧ろ穏やかな河の水の謂いであると解するであろう。しかし、冷静に読めばその流れの危険性にも気づくのである。このような訳文からは、原詩のホラーティウスの第2の声、つまり彼の裏の声が聞こえてくるのである。ジョンソンは、一方において心地よい川の流れのように描きながらも、同時にその川が穏やかな川ではないことも暗示しているのである。このような僅かな部分に、ジョンソンの意識が垣間見えるのである。

そのような、もう一つの例として、田舎の優しい妻の描写を挙げることが出来るだろう。原典では 39 行から 42 行の個所であるが、ジョンソン訳は以下の通りである。

But if, to boot with these, a chaste Wife meet

For household aid, and Children sweet; 40

Such as the *Sabines*, or a Sun-burnt blowse,

Some lustie quick *Apulians* spouse,

Ben Jonson, 39-42. (下線は筆者)

(しかし、もしも、これらを更に高めるために、家庭内の仕事や可愛い子供たちを世話する貞節で相応しい妻がいたら、丁度サビーニーの女か、または日に焼けた丸い太った田舎女か、また陽気で敏捷なアプーリアの妻のような人がいたら…)

35 C. H. Herford, Percy and Evelyn Simpson, vol VIII, p. 290.

ここでは children sweet (dulces liberos) や quick (perniciis) の直訳的な表現には触れない。「妻」に関係する部分に注目したい。原典では *perusta solibus* … *uxor* (ll.41-42) 「日に焼かれた…妻」という表現となっていた。一応表面上では、この「妻」には、戸外で甲斐甲斐しくよく働く妻という肯定的な意味が与えられていたが、同時に色黒であるという含意により否定的な意味も暗示されていたことは既に指摘した。ホラーティウスの裏の声が聞かれる部分であった。この部分において、ジョンソンはその否定的な意味合いにも盲目ではなかったことが判るのである。というのも、彼はこの部分を a Sun-burnt blowse と訳しており、そして、blowse の意味は、a fat, red-fac'd, blotched Wench³⁶ だからである。「丸い日に焼けた太った田舎女」は到底魅力的とは思われない。blowse は spouse との音合わせ rhyme の為に選ばれたとは思われない。このような訳語は、ジョンソンがホラーティウスの裏の声に気づいていたからこそ、用いたものと思われるのである。ジョンソンは、このように、ホラーティウスの巧みな技巧にも気づいていたことは記憶されてよいであろう。

しかし、ジョンソンはエポード訳において、常に直訳的であり裏声の存在を明確にするような翻訳を心がけた訳ではない。直訳調を志向しながらも、時にはそうでない場合もあるのである。葡萄の木の仕事の順番は、ジョンソン訳では以下のようになっている。

The Poplar tall, he then doth marrying twine
 With the growne issue of the Vine; 10
 And with his hooke lops off the fruitlesse race,
 And sets more happy in the place:
 Or in the bending Vale beholds a-farre
 The lowing herds there grazing are:
 Ben Jonson, 9-14.

36 Bailey の定義に拠る。Cf. C.H. Herford, Percy and Evelyn Simpson, p. 108.

(高いポプラの木を、彼はそれから、葡萄の木の成長した若木に巻きつけ結婚させ、そして彼のナイフで実りを生まぬ者どもを切り落とし、そしてその所に、より幸せな物を据える。また曲がり連なる谷の遠くに、啼く群れは草を食む。)

原典においては、ポプラの木を葡萄の支柱にする仕事と、葡萄の木に接木をする仕事は、放牧している牛を遠望する場面に挟まれていた。それによって不調和な感じが醸し出されていることは指摘した通りである。しかしジョンソン訳では、その不調和感は、牛を遠望する場面を入れ替えることによって、つまり後ろに移し葡萄の木の仕事を一連のものとすることで解消されている。直訳調を旨としているように見えるジョンソンにとって、これは一体どういうことであろうか。

しかしジョンソンは初めからこの順番で訳したのではなかった。実は彼は初稿においては原典の通りの順番で訳していた。しかし、最終的には彼は *some editors* の提言を受け入れ、現在のような順番を容認したのであった³⁷。ジョンソンのこの容認は少なからぬ意味を持つように思われる。彼は基本的に直訳調を志向していた。そして直訳する中で、ホラーティウスの裏側の声にも気づいていたことが推定される。その裏の声は原詩において、一見、不可解とも思われる、葡萄の木の描写の順番に反映されていたといってもよいであろう。つまり、ホラーティウスの真意は翻訳において、元の順番を守ることによって伝えられる可能性を持っていた、とも言えよう。ところが、ジョンソンは順番に関して外からの提言を受け入れてしまった。これによって葡萄の木の仕事のシーケンスはより違和感のないもの、より素直な表現に変質してしまった。それにと

37 編者の C. H. Herford と Percy and Evelyn Simpson はその辺りの事情を以下のように記している。‘some editors altered it because the pasturing of cattle seemed out of place between the training of vines and the grafting of fruit-tree; Jonson in his revised text accepted the transposition,’ p. 108.

もなってホラーティウスの裏の声も消失したのであった。こうしてホラーティウスの裏側の声は、ジョンソン訳においては多少の痕跡を残しながらも、無視されるに至るのである。そしてホラーティウスが描いたアンビヴァレントな田園の賛歌は、その肯定的な面のみが強調され、否定的な面は忘れ去られるのである。この葡萄の木の順番の入れ替えの容認は、ジョンソンがホラーティウスの技巧に気づきつつも、田園の賛美の派に与したことを意味する点で、象徴的な意味を持つように思われるのである。

ジョンソン以降、殆どの訳者がジョンソンと同じように、葡萄の木の順番を入れ替えている。例えば Sir John Beaumont (1582-1627) の翻訳はジョンソン以降³⁸、比較的早い時期になされたものの一つだが、葡萄の木の順番はジョンソンと同様である³⁹。このような傾向は以後、順次引き継がれて行くように思われる。Sir Richard Fanshawe (1608-66) に拠る翻訳は 1652 年に出版されたが、彼の翻訳もジョンソンに倣ってか、葡萄の木の順番を同様に入れ替えている⁴⁰。そして、時代の推移とともに、このような田園賛美の傾向に拍車がかかるように思われるのである。

ドライデン以前において、最大の翻訳家の一人にエイブラハム・カウリー

38 ジョンソンは 1612 から 18 年にかけて翻訳したようだ。Cf. C. H. Herford and Percy and Evelyn Simpson, p. 107. なお Sir John Beaumont 訳については、D.S.Carne-Ross and Kenneth Haynes, ed., *Horace in English* (Penguin Classics, 1996), pp. 301-03 参照。

39 以下に Beaumont 訳を引用する。“The lofty Poplars with delight he weds/ To Vines that grow apace,/ and with his hooke unfruitful branches shreds,/ More happy sprouts to place,/ Or else beholds, how lowing herds astray,/ In narrow valleys creepe,” D.S.Carne-Ross and Kenneth Haynes, pp. 301-02.

40 当該箇所は Fanshawe 訳では以下のようになっている。“He, lofty poplars joyns/ Unto adult and marriageable Vines;/ And the wild branches with his Sickle lopt,/ Doth better children in their rooms adopt;/ Or in a hollow valley, from above,/ Beholds his lowing herds securely rove,” D.S.Carne-Ross and Kenneth Haynes, pp. 303-05.

(Abraham Cowley, 1618-67) がいる。彼は若きドライデンに愛好された詩人 “the darling of my Youth the famous Cowley”⁴¹ であった。時代の趣味の変遷とともにカウリーの名声は減じるのだが、往時においては大変な名声を博していた詩人であったことは、18世紀初頭に刊行された *The Spectator* の伝えるところである⁴²。そのカウリーにもエポードの翻訳があるが、それは注目に値する。彼の翻訳においては、ホラーティウスの田園生活に対するアンビヴァレントな態度は、彼に先行する詩人達と同様に消失している。そればかりではない。彼は先行する詩人達をある意味で凌駕しているのである。原詩においては最後に4行の結びが付いており、この部分で *Alfius* の田舎への隠遁の計画が放棄される様が、明らかにされていた。多くの翻訳者はいかに田園賛美に傾斜していても、この最後を無視してはいない。ドライデン的であれ、直訳調であれ、一応は訳を付けているのである。しかし、カウリーは田園生活を賞賛するあまりに、この最後の4行を切り捨てているのである⁴³。このことによって、カウリー訳は全面的な田園の賛歌となり、原詩が持っていた陰影は全く消失するのである。この点を鑑みる時、この時代において如何にホラーティウスの隠された声は無視されていたか、ということが理解されるのである。

そしてドライデンが生きていた時代は、以上のような時代だったのである。ジョンソンが葡萄の木の順番の入れ替えを容認して以降というもの、殆どホラーティウスの裏の声に注意を払う詩人はいなくなったように思われる。ホラーティウスが表の声で讃えた、田園の賛美のみが喧伝されるようになった。その傾向の極地をカウリーに見ることが出来よう。ドライデンが翻訳を行った時代は、このような翻訳思潮の時代であった。ドライデンはカウリー訳からも影響

41 Dryden, “Discourse of Satire”, *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*, ed. George Watson (Everyman’s Library, 1968), vol. 2, p. 150.

42 Angus Ross, ed., *Selections from Tatler and Spectator* (Penguin English Library), p. 543.

43 Abraham Cowley, *Essays Plays and Sundry Verses*, ed. A. R. Waller (Cambridge English Classics, 1906), p. 413.

を受けているように思われるのだが、このような翻訳の時代思潮を考えれば、ドライデンが彼の翻訳を全面的な田園の賛歌に仕上げたとしても、なんら不思議ではないように思われるのである。ドライデン的な翻訳の一因を、このような翻訳の時代の文脈に帰することは決して的外れではないであろう。

このような時代思潮は、意外に根強いものであるように思われる。葡萄の木
の順番は、ある意味で試金石となるものであるが、ドライデン以後の詩人達
においてもジョンソン流の順番が守られていることは、いかにこの傾向が根強い
ものであるかを証明している。例えば、William Somerville (1675-1742) に拠
る翻訳においても順番は入れ替えられている⁴⁴。それどころか、彼の翻訳では
原詩にはない、鷹狩という田舎の楽しみが付け加えられているのである⁴⁵。ま
た Christopher Smart (1722-71) に至っては、“The praises of a country life”
という題名が付けられている。そして“translated literally into English
prose”とタイトルページに注記されているにも拘らず、原詩の順番は守られて
はいないのである⁴⁶。そして、もう一人のジョンソン、18世紀の巨匠である
サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) も、ベン・ジョンソンと
は異なる文体によってではあるが、直訳調を心がけているのだが、葡萄の木の

44 “But for the vine selects a spouse,/ Chaste emblem of the marriage-bed,/ Or
prunes the too luxuriant boughts,/ And grafts more happy in their stead./ Or
hears the lowing herds from far,/ That fatten on the fruitful plains,” Alexander
Chalmers, ed., *The Works of the English Poets from Chaucer to Cowper* (Georg
Olms Verlag, 1970, rep of 1810 ed.), vol. XI, p. 209.

45 Somerville によって付加された鷹狩は以下の通りである。“His towering falcon
mounts the skies,/ And cuts through clouds his liquid way;/ Or else with sly
deceit he tries/ To make the lesser game his prey.” Alexander Chalmers, p. 209.

46 “Wherefore he either weds the lofty poplars to the mature branches of the
vine; and, lopping off the useless boughs with his pruning-knife, he ingrafts
more fruitful ones; or he takes a prospect of the herds of his lowing cattle,
wandering about in a lonely vale;” *The Works of Horace*, translated literally into
English prose, by Christopher Smart, revised by Theodore Alois Buckley
(London, George Bell & Sons, 1888), p. 115.

順番に関しては、原詩の通りではないのである⁴⁷。その点にも、時代思潮の根強い影響力を推し量ることが出来るのである。

また葡萄の木の順番に象徴的に窺われるような、田園の賛美の傾向は、単にイギリスに留まるものではないのかもしれない。というのも、19世紀フランスに至ってもなお同様の傾向が認められるからである。1856年にパリで出版されたホラーティウスの翻訳詩集 *Oeuvres Complètes d'Horace*⁴⁸ はページの下半分にラテン語原文を印刷している。このような印刷の様式から読者は当然、逐語的な訳文を期待するであろう。しかし、葡萄の木の個所のフランス語訳は、*Tantôt aux tendres rejetons de la vigne il marie les hauts peupliers; tantôt, avec la serpe, il émonde les rameaux inutiles pour en greffer de plus féconds, ou bien, il voit errer au fond d'une sombre vallée ses troupeaux mugissants.* (p. 139) となっているのである。フランス語訳は英訳の殆どと同じように、葡萄の木の順番を入れ替えているのである。フランスにおける、このような訳の始まりは詳らかではないが、ひょっとするとベン・ジョンソンの時代において、既にフランスにおいてこの順番の入れ替えが行われていたのかもしれない。(フランスの影響という問題は興味深い問題であるが、ここでは触れない。) しかし、ともあれ、19世紀フランスにおいても、なおこのようなフランス語訳が出版されたことは、いかに田園賛美の風潮が根強く、また根深いものであったかを象徴しているように思われるのである。

47 J. D. Fleeman, p. 34.

48 *Oeuvres Complètes d'Horace*, traduites en Français par Amar, Andrieux, A.V. Arnault, Bignan, Charpentier, PH. Chasles, Daru, J.N.M. De Guerles, Léon Halevy, Du Rozoir, Féletz, Liez, Naudet, Ouizille, C.L.F. Panckoucke, Ernest Panckoucke, De Pongerville, A. Trognon, (Paris, 1856, Garnier Frères, Libraires).

4 1684 年頃のドライデンの状況から考える

前章においては、ドライデンの翻訳を原詩の英訳の比較的に長い歴史の中において検証し、いかにドライデンが時代の翻訳の思潮の波を被っていたかを指摘した。しかし、視点をよりドライデンに近づけ、ドライデンが翻訳を行った 1684 年前後の状況から考察することも、ドライデン翻訳の謎を解く手がかりを見出すのに、少なからず有益であるように思われる。

ドライデンがジェイコブ・トンソンと組んで、1684 年 2 月に最初の『雑詠集』*Miscellany Poems* を刊行したことは既に述べた通りである。そして、この成功に気をよくして、『雑詠集』の第 2 集を計画したことも述べた。第 2 集は翌 85 年の 1 月に出版されたが、ドライデンは前年の後半を主に詩集の為の翻訳に費やしていた。彼は第 2 集 *Sylvae* の序文を「自分はいま翻訳という病気に罹っている…」という言葉で始めているが⁴⁹、それによっても、前年の後半は翻訳に従事していたことが窺えるのである。この序文において彼は、彼が翻訳した古典詩人達について論評を加えている。ウェルギリウスやルクレティウスやテオクリトスを評した後で、彼はホラーティウスに触れている。そして彼が翻訳したホラーティウスのオードの第 3 巻の 29 歌に関して次のように述べている。

One Ode, which infinitely pleas'd me in the reading, I have attempted to translate in Pindarique Verse: 'tis that which is inscrib'd [sic] to the present Earl of *Rochester*, to whom I have particular Obligations, which this small Testimony of my Gratitude can never pay. 'Tis his Darling in the *Latine*, and I have taken some pains to make it my Master-Piece in *English*: For which reason, I took this kind of Verse, which allows more Latitude than any other.⁵⁰ (下線は筆者)

ホラーティウスのオード第 3 巻の 29 歌は、ドライデンの言うとおりに、「ピ

49 Earl Miner and Vinton A. Dearing, p. 3.

50 Earl Miner and Vinton A. Dearing, pp.16-17.

ンダロス風にパラフレイズ」(paraphras'd in Pindarique Verse) されており、そしてロチェスター伯に捧げられている (inscrib'd to the Right Honourable Lawrence, Earl of Rochester)。ロチェスター伯とは、クラレンドン伯エドワード・ハイド (Edward Hyde, Earl of Clarendon, 1609-74) の次男であるロレンス・ハイド (Lawrence Hyde, 1641-1711) を指す⁵¹。彼の姉の Anne (1637-71) はチャールズ 2 世の弟、ヨーク公ジェイムズ (James, Duke of York, 1633-1701) と結婚し二人の娘を産んだが、その二人ともが後に女王となった。ロレンス・ハイドは 1682 年にはロチェスター伯に叙せられていた。また彼は先にドライデンの風刺詩「アブサロムとアキトフェル」(Absalom and Achitophel, 1681) の中で Hushai として描かれた (ll. 888-97) ことがあった⁵²。ドライデンは、このようなロチェスター伯に恩義があることを表明し、ホラーティウスのオードを彼に捧げることで恩返しをしたい旨を明らかにしている。ホラーティウスの第 3 巻の 29 歌は——このオードはローマの有名なパトロンであったマエケナーヌ (Maecenas) にホラーティウスが語りかけるものであったのだが——ロチェスター伯のお気に入りの詩であったようだ。そしてホラーティウスをピンダロスの詩風で訳したのは、ピンダロス風をドライデンがより自由度の高い詩風である、と考えていたからであり、自由度を駆使することで、英語による傑作を作りたいと考えていたからでもあった。

さて、ドライデンが言う、ロチェスター伯に対する恩義とはどのようなものであろうか。ドライデンはこの時期、かなり生活に困窮していたようである。彼はチャールズ 2 世の下で、桂冠詩人 (Poet Laureate) となり王室修史官 (Historiographer Royal) になっていたが、給料の支払いが常に滞っていたことは

51 Edward Hyde, Earl of Rochester については、*Encyclopedia Britannica* や Paul Hammond, ed., *The Poems of John Dryden*, vol. 1. 1649-81 (Longman, 1995), p. 525. また H. T. Swedenberg, Jr. ed., *The Works of John Dryden*, vol. 2 (University of California Press, 1972), pp. 280-81 参照。

52 H. T. Swedenberg, Jr., p. 32.

よく知られている⁵³。このような時にあって、ドライデンがロチェスター伯に窮状を訴える手紙が残っている。Charles E. Ward 編集によるドライデン書簡集では第 20 番の手紙であるが⁵⁴、ロチェスター伯に宛てた手紙の中で、最初に自分の窮状 (my extreame wants, my ill health) を訴えた後で、丁重にロチェスターに懇請している。‘... on some occasions, perhaps not known to you, [I] have not been unserviceable to the memory & reputation of My Lord your father. After this, My Lord, my conscience assures me I may write boldly, though I cannot speake to you. I have three sons growing to mans estate, I breed them all up to learning, beyond my fortune; but they are too hopefull to be neglected though I want.’ (p.21) ここでドライデンは、ロチェスター伯の父親クラレンドン伯への彼の奉公にも言及し、その記憶を新たにすることで、彼への厚意を呼び覚まそうとしている。そして、自分の息子達にも言及している。彼には三人の息子があつたが、丁度この時期に三人ともに金のかかる時期に達していた。長男 Charles は 1684 年には 18、19 歳になっていたようだが、前年にはケンブリッジ大学のトリニティー・カレッジに入学していた。また次男 John はまだウェストミンスター校に在学していたが、翌年にはオックスフォード大学のクライスト・チャーチ学寮に入学が決まっていた。また三男 Erasmus Henry はチャーターハウスに在学していたが、次男と同様に翌年にはオックスブリッジへの進学が取りざたされていた⁵⁵。

このような自分の身の辺の事情を説明し、そして金銭的な援助の取り成しを次のように懇請するのである。

53 Charles E. Ward, *The Life of Dryden* (University of North Carolina Press, 1961), p. 178.

54 Charles E. Ward, ed., *The Letters of John Dryden* (Duke University Press, 1952), pp. 20-22. この 20 番の手紙に日付はないが、Ward は 1863 年の 8 月と推定している。Cf. p. 151.

55 この辺りの事情は W. D. Christie, lvi. に拠った。Cf. W. D. Christie, ed., *The Poetical Works of John Dryden* (Macmillan & Co., 1908).

Be pleas'd to looke on me with an eye of compassion; some small Employment wou'd render my condition easy. The King is not unsatisfy'd of me, the Duke has often promis'd me his assistance; & Your Lordship is the Conduit through which their favours passe. Either in the Customes, or the Appeales of the Excise, or some other way; meanes cannot be wanting if you please to have the will. Tis enough for one Age to have neglected Mr Cowley, and sterv'd Mr Buttler; but neither of them had the happiness to live till your Lordship's Ministry. In the meane time be pleas'd to give me a gracious and speedy answer to my present request of halfe a yeares pention for my necessities. (p. 21. 下線は筆者)

王とはチャールズ 2 世を指し、公爵とは王の弟、ヨーク公ジェイムズを指す。Costomes については誤解があるようだ⁵⁶。ドライデンは Collector of the Customes には任命されていない。「カウリー氏を無視し、パトラー氏を飢えさせたのは、一時代だけで十分です」という言葉には切実な響きが感じられる。この懇請は効果があったようで、8 月 22 日にはドライデンに 75 ポンドが支払われている⁵⁷。以上のように、この時期に金銭的にやや困窮していたドライデンに、ロチェスター伯の口添で支払いの遅れていた給金が支払われたことから、ドライデンはロチェスター伯にますます恩義を感じるようになったことは明らかであるように思われる。ドライデンが *Sylvae* の序文で言及している「恩義」とは、このような金銭的な恩義であっただろうことはほぼ確実である⁵⁸。

また、視線をロチェスター伯の方に転じてみると、ロチェスター伯自身の身にもこの時期やや興味深い出来事が起こっていた。彼はクラレンドン伯の息子として順調に出世していた。1679 年には First Lord of the Treasury に任命され、また a privy councilor にもなっていた。しかし、一時的にはあるに

56 Charles E. Ward, *The Letters of John Dryden*, p.152.

57 Charles E. Ward, *The Letters of John Dryden*, p.151.

58 W. D. Christie, pp. 395-97.

せよ、彼が政権の中枢から外されるという苦渋を味わうのが、1684年の8月であった。つまり彼は体よく‘kicked upstairs’されたのであった⁵⁹。彼は失意の情を禁じえなかったであろうことは、容易に推測できるところである。そして、この時期のこのようなロチェスター伯の個人的な事情が、ホラーティウスのオードの翻訳に微妙な影響を与えているように思われるのである。

ホラーティウスのオードの第3巻の29歌はホラーティウスが、パトロンであったマエケーナース（Maecenas はフランス語で学問芸術の擁護を意味する *mecenat* の語源であるが）に、世の煩わしさを離れて、ホラーティウスの別荘に来ることを誘う詩である。そしてホラーティウスは、「将来のことは判らないのだから、いつわりなく送る一日一日が心の平安をもたらす」⁶⁰ といっている。しかしドライデンにあっては、彼が翻訳に携わっていた時に、彼が頭の中で思い描いていたのは、マエケーナースではなく、彼自身のパトロンであるロチェスター伯であったことは、ほぼ確実であるように思われるのである。まず、オードの第3巻29歌は、原文では次のように始まる。

Tyrrhena regum progenies, tibi
Non ante verso lene merum cado
Cum flore, Maecenas, rosarum et
Pressa tuis balanis capillis

Iam dudum apud me est: eripe te morae...⁶¹ 5

Horatius, *Odes*, III, xxix, 1-5.

（エトルリアの、王の子孫よ、貴方の為に、以前には決して傾けられたことのない壺には、穏やかなお酒が薔薇の飾りと共に、マエケーナースよ、また、貴方の髪の毛の為に、搾られたアラビアの香油が私の傍に、ずっと

59 David Ogg, *England in the Reign of Charles II* (Oxford Paperbacks, 1984), p. 655.

60 藤井昇氏の要約を借用した。Cf. 藤井昇訳『ホラーティウス 歌章』（現代思想社、1973）、174頁。

61 Paul Shorey, p. 91.

以前から用意してございます。ぐずぐずしないでお出かけなさい…)

ホラーティウスはマエケーナースに、都会の喧騒を逃れて、自分の別荘にやって来るように勧める。もう既に葡萄酒も用意してあるという。このように、ホラーティウスは恐らく Sabine の別荘からパトロンであるマエケーナースを招くのである。Sabine の別荘はホラーティウスのものでありワインも彼のものののだが、*apud me* という言葉遣いからは、あたかもマエケーナースのものであるワインをホラーティウスが管理してあげていると、言っているような心配りが感じられるのである。そして、上に続くと思われる部分をドライデンは、以下のように翻訳している。

II.

When the Wine sparkles from a far,
And the well-natur'd Friend cries, come away;
Make haste, and leave thy business and thy care, 10
No mortal int'rest can be worth thy stay.

III.

Leave for a while thy costly Country Seat; ...

Dryden, *Odes*, III, xxix, 8 – 12.⁶² (下線は筆者)

(遠くから葡萄酒が煌めき、善意の友達が叫ぶ時、離れなさい。急ぎなさい、そして貴方の仕事や心配を捨てなさい。どんな人間の利害も、貴方が留まるには値しません。暫くの間、貴方の素晴らしい田舎の邸宅に去りなさい。)

「ピンダロス風のパラフレイズ」という言葉に示されるように、ドライデンは 29 歌をかなり自由に訳している。その為に上の 3 行に直接に対応する部分を原典の中に見つけることはかなり困難であるのだが、ともあれ、ここで注目し

62 Earl Miner and Vinton A. Dearing, p. 81.

たいことは、「汝の田舎の邸宅」という言葉である。原典においては、詩人のホラーティウスが自分の別荘にマエケーナースを招く、という形式になっていた。しかし、ドライデンでは、詩人はロチェスター伯に、「あなたご自身の田舎の邸宅」に退くことを勧めているのである。この田舎の別荘は、1676年にロチェスター伯がドライデンの義兄にあたる Sir Robert Howard から買い取った Wooton Bassett にある manor house のことであるかどうか特定は難しいが⁶³、ともあれロチェスター伯が豪壮な邸宅を持っていたことは確かである。ドライデンは原典を離れて、パトロンであるロチェスター伯に本当に田舎で煩わしさを忘れて過ごすことを勧めている。ドライデンは原典から離れ、彼自身の当時の現実を読み込んでいる。「汝の田舎の邸宅」という表現を用いたことの中に、彼の思いが図らずも垣間見えているのである。

そして、ドライデンのロチェスターに対する切実な思いやりは、*Sylvae* の中の4つのホラーティウス翻訳の配列を考える時、更に強く感じられるように思われるのである。ホラーティウス翻訳は *Sylvae* の中ほどの部分に連続して並べられていた。最初のものは、オードの第1巻の3歌だが、原詩はアテーナイに向かうウェルギリウスの旅の安全を祈ることが、詩の前半部のテーマであった。この詩は、ドライデンにおいては、もう一人のパトロンであるロスコモン伯 (Wentworth Dillon, 4th Earl of Roscommon, 1637-85) に捧げられ、ロスコモン伯のアイルランドへの旅の安全を祈るものとなっていた。次に配置されているのはオードの第1巻の9歌であった。これは誰にも捧げられてはいない。この9歌は、「戸外の冬の寒さ、炬を燃やし、酒を酌み、他のことは神々に委ねよ。明日を思わず、青春の楽しみに耽ること」⁶⁴を歌う詩であった。ホラーティウスの別荘で、のんびりと過ごすことを勧める詩であった。そして、この詩の次にオード第3巻の29歌は置かれていた。そして、29歌の次がエポード第2歌であった。このような配列は決して偶然ではない。つまりこ

63 James Anderson Winn, p. 400 and p. 609 n.

64 藤井昇訳 18 頁。

これらの詩は、パトロンの旅の安全を祈ったり、また田舎での休息を勧める詩であるが、それらが連続して並べられているのである。オードの第3巻の29歌において、ドライデンはロチェスター伯に、閑職を甘受し寧ろ田舎での休息を真剣に勧めていた。ロチェスター伯に対する、そのような希望や願いはエポード第2歌にも引き継がれていると思われるのである。ロチェスター伯に寄せるオードの中で、田舎での閑居を勧め、そして次に同じテーマの詩、つまり田舎の賛歌のエポードを配置することで、更に強い印象を与えようとしていることが見て取れるのである。それ故に、そのように考えてくる時、ドライデンがエポードに隠された、ホラーティウスの裏の声をまったく無視した理由も自ずと明らかになるように思われるのである。ドライデンとロチェスター伯にとっての1684年という年の状況を考察する時、ドライデン的な翻訳の原因は氷解すると言っても過言ではないように思われるのである。そしてこのような状況が、ドライデンのホラーティウス翻訳に影響を与えなかったとは考えられないのである。つまり彼はホラーティウスの裏の声に、仮に気づいていたとしても、その裏の声を正確に訳すことよりも、寧ろパトロンであるロチェスター伯に対する思いやりを優先したのだ、と言ってもよいだろう。

ドライデンにとって、またロチェスター伯にとって、1684年の状況の主要な部分は以上のようなものであった。ドライデンのロチェスター伯に対する恩義の表明には何かしら真摯さが感じられる。彼の1693年の戯曲 *Cleomenes* の献辞中の言葉が興味を引くのである。この献辞はロチェスター伯に宛てられたものだが (to the Right Honourable the Earl of Rochester, Knight of the most Noble Order of the Garter, &c.) その中で、ロチェスター伯に対し色々感謝と尊敬を捧げた後で、最後のパラグラフにおいて、以下のように締め括っている。 “And I shall be proud to hold my Dependence on you in Chief, as I do part of my small Fortune in *Wiltshire*. Your Goodness had not been wanting to me, during the Reign of my two Masters. And even from a bare Treasury, my success has been contrary to that of Mr. *Cowley*; and *Gideon's Fleece*

has then been moisten'd, when all the Ground has been dry about it"⁶⁵

ロチェスター伯に対する感謝と尊敬は終世変わることはなかったようだ。戯曲の献辞は度々パトロンに対する阿諛追従に終始する傾向があるが、しかし、この場合、ロチェスター伯に対する感謝と尊敬の言葉に嘘はないように感じられる。このような感情が、ドライデンをして、一時的にはあれ閑職に就くことを余儀なくされたロチェスター伯に、田舎での静養を勧めさせたと言えるであろう。このような心情が、翻訳の中で、ホラーティウスの隠された、裏の声を全く無視する要因となって作用したのである。このような事情がホラーティウスの裏の声を無視する要因に繋がったことは、極めて当然であったように思われるのである。

5 結び

ドライデンが *Sylvae* (1685) の序文において、「自分はいま翻訳という病気に罹っている」と書いたことは既に指摘した。この言葉の通り、彼はこの時期からその生涯を終える 1700 年まで、経済的な要因があったとはいえ、旺盛に翻訳活動を繰り広げている。この期間にはユエナーリスとベルシウスの風刺詩の翻訳詩集 (1693) やウエルギリウスの翻訳集 (1697)、そして生涯の最後の年には『古今説話集』(*Fables, Ancient and Modern*, 1700) が出版されている。そして、彼の翻訳については、度々、政治的な偏向訳である、ということが指摘されて来た。その偏向性については、若干の慎重さが必要と思われるが⁶⁶、

65 Vinton A. Dearing, ed., *The Works of John Dryden*, vol. 16 (University of California Press, 1996), p. 75. 尚、Wiltshire 云々は、ドライデンがロチェスター伯の田舎の邸宅の借家人になっていたことを指すようである。同書 369 頁参照。

66 しかし、そのようなドライデンの政治的な偏向性の特質については、より注意深い分析と検討が必要であることを、筆者は指摘してきた。詳しくは拙論「ドライデンのウエルギリウス翻訳 —その政治性について—」『英文学評論』(京都大学総合人間学部英語部会、第 LXXIV 集) pp. 29-58 を参照のこと。

ドライデンがウェルギリウスを翻訳するにあたり、時の支配体制である、ウィリアムとメアリーの共同統治体制に対する、風刺的な詩文をその翻訳に潜ませていることは、つまりはウェルギリウスの原作には存在しなかった要素を書き込んでいたことは、大筋では認められなければならないと思われる。また、1680年のヨーク公ジェームズの王位の継承問題に絡んでの「継承排斥の危機」Exclusion Crisis に際して、ドライデンは王党派に利するべく、プロパガンダとも言うべき風刺詩「アブサロムとアキトフェル」を刊行したが、この詩においても、王党派賛美の蔭に、王党派に対する冷ややかな視線を潜ませていたのであった⁶⁷。このような例からも察せられるように、ドライデンは表面の意味とはまた別の含意を表現に含ませることが容易にできる詩人であった。このような技巧の使い手であった。それゆえに、もしもドライデンに意欲があれば、エポードの第2歌に見られるホラーティウスの表と裏の二つの声を何らかの形で英語に移しかえることは可能であったと思われるのである。

ところがエポードの第2歌の翻訳にあたっては、事情は全く異なっていた。ホラーティウスの原詩に存在したアンビヴァレントな姿勢は無視され、裏の声はまったく払拭されていた。その原因はエポードの翻訳の歴史の中に求めることができることは、既にわれわれが見てきたところである。ベン・ジョンソンは、葡萄の木の描写の順序を入れ替えることを容認した。ベン・ジョンソンが結果的に、順序を入れ替えた「最初の」訳者であるかどうかは詳らかにしないが、しかし、ジョンソンがそのように訳した極く初期の一人であることに間違いはないだろう。このことは、単にベン・ジョンソン個人の問題にとどまる事ではないように思われる。この容認は、以後に勢い付くと思われる、田園賛美の傾向を決定的なものにした、という意味で、実に象徴的な出来事であったと言っても過言ではないのである。

また、このような田園賛美が横行する背景には、ホラーティウスの独特の技

67 拙論『『アブサロムとアキトフェル』とドライデンの姿勢』『人文研究』（大阪市立大学、第35巻第7分冊、1983）pp. 54-71 参照。

巧が関係していたかもしれない。ホラーティウスのエポード第2歌における表現は大変に抑制されていた。そのことが、結果的にホラーティウスの本意を判りにくいものにしていった。ベン・ジョンソンは原詩の陰影を理解していたと思われるのだが、他の詩人達については、ホラーティウスの技巧を十分に理解していたかどうかは甚だ疑わしいように思われる。というのも、次のような例が見られるからである。H.A.Mason の記すところでは、1567年に Jacobus Cruquius という人物が彼自身の、ホラーティウスのエポード集を出版したのだが、この第2歌には “*Laudatio uitae Rusticae exornatae summa rerum tranquillitate*”と題名を付けていたという⁶⁸。この題名を訳せば、「物事の最高の静謐によって飾られた田舎の生活の賛歌」とでもなろうか。またドライデンは、1625年に Johannes Weitzius に拠って出版された *De Laudibus Vitae Rusticae* というコメンタリーを読んでいたようだが⁶⁹、「田舎の生活の賛歌について」という題名からも、このコメンタリーが田舎の生活の好ましい面に重点を置いて論じていることが推測できるのである。このように、ラテン語の副題やコメンタリーの題名から、既に16世紀においてはエポードの一面が、つまり田園賛歌という一面がより強力に喧伝されていたことが判るのである。このような事態に至った原因は、田舎の生活の積極的・肯定的側面が人口に膾炙する要素を備えていたことにあると想像されるが、同時に、恐らくは原詩のもつ、抑制された表現の中に含まれている意味の判りにくさにも原因があったと考えて間違いはないであろう。ともあれ、このような事情によってエポード第2歌は田舎の賛美の歌として定着し、それに伴って英訳もまた田舎の賛歌として翻訳されることがなんら不思議ではない、という文脈が誕生したと考えられるのである。

加えて、更に1684年前後の、ドライデンとロチェスター伯両者の事情もドライデン翻訳に影響を与えていると考えられる。ドライデンはこの時期に経済

68 H. A. Mason, p. 48.

69 H. A. Mason, p. 48.

的に逼迫していたが、ロチェスター伯の口添えで窮状を一時的にはあれ脱することができた。それが *Sylvae* の序文でドライデンが言及した、ロチェスター伯に対する「特別な恩義」であろう。そしてまた、ロチェスター伯自身は一時的にはあれ、この時期に政府の閑職に追いやられていた。このような状況は、複合してエポードの第2歌を完全な田園賛美の詩に変質させた、もう一つの原因となったと考えられるのである。

以上、われわれはホラーティウスのエポード第2歌の特質を確認したうえで、ドライデンの翻訳の特質を考察した。古典作品の翻訳というものの正確な理解と享受のためには原典の正しい解釈が必須の要件であるという認識の許に、ドライデンの翻訳をエポードの英訳の歴史という文脈の中において検証することを通して、ドライデンの翻訳が英訳の歴史から強い影響を受けてきたこと、また1680年代という固有の歴史的事情と密接な関係をもつものであることを示してきた。ドライデンの翻訳を現在のものに仕立て上げた要因が歴史的な要因だけだったなどというつもりはないが、にも拘らず、この歴史的な要因を無視しては、ドライデン的な特質の由来の大部分を見誤ることになる、と主張することは許されるであろう。これはいうなれば、ドライデンの翻訳は、広くまた狭く、時代の影響を受けていた、という有り触れた、しかし、考えてみれば実に穏当な結論に、われわれは立ち至った、ということでもであろう。しかし、このような一般論では説明できないドライデン翻訳への歴史的な影響の詳細を多少なりとも解明できたのではないかと考える次第である。

本稿は十八世紀英文学研究会（2003年12月20日、同志社大学）における口頭発表草案に基づくものである。なお、Lindsay C. Watson氏による新しいコメンタリー、*A Commentary on Horace's Epodes* (Oxford University Press、2003年12月?)は残念ながら参照できなかった。